

私の戦い

南部中・1 國嶋 夕蒼

それは小学校六年生卒業間近のことだった
担任の先生から頼まれたのだ

「南中の新入生代表として作文を読んでほしい」と

私はわくわくした

でも心の奥底には「できるかな」とネガティブに考える自分がいた

「新入生代表」

「新入生代表」

気づくとこの言葉が頭に浮かんでいる

その日から

私はこのプレッシャーと戦うことになった

そして小学校を卒業した

春休み

私は作文を考えた

でも頭が全然回転しない

いろいろな人にアドバイスをもらった

耳には、入っている

だけど頭には、入っていなかった

書いては消す

書いては消す

そのくり返しだった

数日たったある日

作文が完成した

まずは第一関門突破だ

いざ練習

すぐくかみまくる

絶望した

でも絶望してもしようがない

だから練習を再開した

入学式前日

私は南中に練習をしに行った

見たこともない体育館

見たこともない先生

全てが初めてだった

練習が始まった

先生がすごく丁寧に教えてくださった

少し安心した

ステージ上から体育館を見てみた

明日 そこには

初めて会う先生

初めて会う先輩

初めて会う保護者

初めて会う同級生

がいるのだ

想像するとぞっとした

読む練習もした

完璧に読めた

第二関門突破だ

ついに入学式当日の朝

緊張してご飯の味がわからなかった

いそいそと支度をして

最後の練習

かまずに読めた

だけど緊張しすぎて

いつもは気にしていない

イントネーションも不安になる

そこは本番の自分に任せることにした

いざ登校

いつもと違う道

いつもと違う服

緊張から沈黙が続く

そして頭の中では

相変わらず

「新入生代表」

この言葉がぐるぐるしていた

学校に着いてしまった

クラス発表の紙がはられた

そこには見たことない名前ばかり

より緊張した

そしてついには

入る玄関を間違えてしまった

この日一番あせった

無事教室に着き体育館に行った

その道のりが

とてつもなく長く感じた

入場し、席に着いた

「間違えたらどうしよう」

「かんだらどうしよう」

こんなことばかり考えていた

でも入学式は淡々と進んでいた

ついに私の番

緊張はピークを迎えていた

頭が真っ白になりながらも読んだ

もうこの時の記憶はない

でもとにかく読み終えた

私は

「新入生代表」